
スパイダー（夢編）

モリノツグミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スパイダー（夢編）

【Nコード】

N3451E

【作者名】

モリノツグミ

【あらすじ】

中学に入学直後に、些細なきっかけで恋をした女の子の小さな恋物語。

第1回

中学生になって、何日かは緊張してばかりだった。他の小学校出身の生徒と机を並べて授業を受けたりしななければならぬからだ。席順によつては同じ小学校出身者同士の隠語めいた会話に、やりにくさを感じることもあった。

入学してすぐの頃、こんなことがあった。

掃除の時間、この学校で一番古く、元は墓場だ首塚だとありきたりなことを云われている理科室の担当になった。落ち武者の霊が…という噂もあったが、怖がってサボれば担任に怒られるので（国語担当の癖に学生時代にラガーマンだったそうで、不必要にガタイの良い怖い先生だった）やらざるをえなかった。

理科室は想像以上に汚かった。天井に蜘蛛の巣が張っていたりして、今まで誰も真剣に掃除をしたことがないのだろうと思った。

2

私は最初に目に付いたのが蜘蛛の巣だったので、長い箒の柄の部分で蜘蛛の巣を払おうとした。

すると男子の誰かにこう言われた。

「前田さん、ここの掃除は床と机だけでいいらしいよ、そんなのしなくていいよ」

私は一度やりかけたので、気になってしばらく箒を振り回していたが、一瞬その箒がふわっと軽くなった。

「ここ僕がやるから、前田さんは椅子動かしててよ」

声の主は、違う小学校の長谷川君だった。

長谷川君は背が高く、それだけの理由でバスケット部とバレー部の先輩がわざわざ教室まで来て勧誘していた。当の本人は他の部に入

りたいらしく、断っている様子だった。

私だと背伸びをしてぎりぎりでしか届かないのに、長谷川君だと簡単に届くんだなと感心してみると、彼の耳の後ろにほくろがあることに気付いた。

あんなところ、本人も気付いていないかもしれない。

長谷川君は正面から見るとそうでもないけど、横顔ちょっと格好良いかもしれない、と思った。

多分それが、彼を好きになった瞬間だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3451e/>

スパイダー（夢編）

2011年1月18日22時41分発行